

ザロモン・マイモン

『新論理学試論』付録

エーネジデムス宛のフィラレーテスの書簡

平川 愛・栗原 隆 訳

Salomon Maimon

Briefe des Philaletes an Aenesidemus.

In : Versuch einer neuen Logik.

Herausgegeben von der Kantgesellschaft
Verlag von Reuther & Reichard (Berlin) 1912

übersetzt von
HIRAKAWA Ai und KURIHARA Takashi

エーネジデムス宛のフィラレーテスの書簡

第一書簡

『エーネジデムスもしくはイエーナのラインホルト教授によって提起された根元哲学の基礎について』という標題の学兄の新著は、私にとってその内容からしてもその目的からしても、非常に興味深いものがありました。その根底にある、あらゆる体系欲求から解放された懷疑的方法是私の趣味からすれば、非常に好ましいもので、いたるところ洞察している論争的な頭の良さは、明澄で、贅沢なまでに詰め込まれた講述は、私にとっては非常に魅惑的です。最近の哲学についての学兄の思索は、私の思索と密接な関係にあります。学兄の思索が私の思索からたとえある部分で逸脱していようと、主要な部分では非常に合致していますので、私は学兄に、ほかならぬ、私が学兄の著作を拝読した際に直面した幾つかの所見を世間に伝え、厳密な批判にさらす自由を持ちますなら、私の尊敬を証し立ててできると信じます。

尊敬すべき方よ、そこから私が見たのは、学兄にとって哲学は切実な問題だということ、学兄は【272】独断的な哲学の古臭い貴族からも、批判哲学の個人的な功績からも、一方を排除することで他方に耽るというように、誘惑されることなどなかった、ということです。むしろあなたは一方を正しく扱っておいでです。学兄は、あなたの懷疑論の武器でもって、批判哲学から、それによって創られた制空権をその手から奪い去ろうとしたものですから、

次のことを同時に認識させることになったのです。すなわち、あなたがこの制空権を（政治的な世界においてはそうなるのが常のように）それだけで維持しようとしているのではなく、むしろ、制空権が合法的に属する独断的な哲学のために維持しようとなさっているんだということをです。

私も、学問の女王たる哲学と数年来、親しく付き合ってきたことを自慢することができます。その性格を正しく学ぶために、哲学の歩みをすべて観察して、すべての思いつきに順応してきました。哲学は私に好意の証しを全面的に拒んだわけではありませんでした。哲学の多くの求愛者たちの嫉妬にもかかわらず、私に有利に定められました。自称求愛者たちの何人かは、なるほど哲学に言い寄りましたが、結末が教えてくれたように、哲学の人柄ゆえではなく、その能力ゆえだったのではないでしょうか？ 別の人たちは、追い求めていた娘（道徳、神学）のゆえに、哲学に言い寄ったのです。これに対して哲学に対する私の愛は、常に純粹で、哲学の持っているものを目的にしていたのです。

尊敬すべき貴婦人が人間の気分のすべてを、知らなくてもよかったのはどうしてでしょうか。哲学の魅力の有り難さが分からなかった求愛者の幾人かは、哲学に（野蛮人のやり方で）辛い家事労働をさせたのでした。[213] それに対して別の人たちは、哲学の魅力に嫉妬しながら、（東洋人のやり方で）部屋に閉じ込めたのでした。そこで哲学は、長い間、弱り果てなければならなかったのです。—— 自分自身の選択に基づいたのではなく、むしろ、もつとまじな気晴らしがなかったたので、暫く哲学の周辺を飛び回っていて、哲学の方で彼らの好意を断わらなければならなかったような、そうした若干の人たちは、侮りながら哲学を自分から突き倒して、これまで送られて来たと言っていた恋文を、押し付けられたものであって、もつと立派な求愛者によって盗まれたものだ、説明するよいうなことにまでなっていたのです。

政治家は、哲学をふしだらな人物として刑務所へ送ったのです。彼らに受け入れられたような美しき精神は、哲学の魅力を（それを知らないまま）謳うか、あるいは風刺したりしたのです。ところが天上のミューズは、あらゆる過剰な賞賛や不正な非難を超えて高まっているのです。ミューズの欠点でさえもミューズの完全性を高めることが確信されるなら、ミューズは、実際そうであるように、知られていようとします。ミューズは嫉妬も無関心も我慢できないのです。

人々がこれまで、哲学の基礎付けにおいて犯したすべての過ちと失敗が単に、彼らが哲学を目的自体としてではなく、他の目的のための手段として見なしていたところに起因していると、私は思います。彼らは、哲学をするに際して企てたさまざまな目的に従ったものですから、哲学の基礎付けへのさまざまな道を辿らなければならなかったのです。それですから、誤解とか論争とか、そしてさまざまな対立する哲学説があるわけです。【274】すべてのこれらの党派が哲学を、理性の形式によって規定された目的自体として求めていたなら、理性の単にそうした原理を基礎にしていたなら、それによって私たちの認識においてありうる最大の統一が達成されたであろうが、それでもこの最高の理想に多かれ少なかれ接近するさまざまな体系が存在し得たでありましょう。しかし、これらの体系は、あるものが他のもの以上に体系であるという点で違っているものであって、ある体系が他の体系とは違う結論に到るだろうという点で違っているわけではありません。ここではいっさいの結論は捨象されているからです。

まさにそうやって美的な感情に関してさまざまな誤解やさまざまな論争が生じています。争っている党派は（それが芸術家であれ知識人であれ）、趣味の仕事を、そうであるべきであったのだが、自由な構想力を行使する際に形式的な完全性に従ってではなく、むしろどんな党派もこうした仕事を表象するにあたって考えている別の目的に従って、評価するからです。彼らの意見は、それですから、彼らによって表象された目的の違いに従って、さまざま

まな結果になったに違いありません。これに対して、単に形式的な目的の表象は、どんな場合でも一樣です。

既に私は、別のところで（『哲学の領域における放浪』において、しかも美学についての論考において）次のことを示してきました。すなわち、善き趣味が、普遍妥当なものとして基礎付けられ得るのは、何らかの実質的な目的において肯定的に基礎付けられた規則によってでは決してなく、むしろ、否定的な【275】規則によって、言うなれば私たちに、どんな場合にあって、美を評価するに当たって、基礎に置かれた実質的で単に主観・体的な目的をどのように捨象するべきなのか、そして単に普遍妥当で形式的で、従って客観・体的な目的だけをどのように考察するべきなのかを教えてくれる規則によってだ、ということをやす。

こうした（誤解や争いが生じるといふ）重要な所見はさまざまな学問においてのみならず、すべての人間の関心事において、いや、人間社会一般に関してさえ、生起します。人間社会における争い、敵対そして相互の不信は、人間社会の本性やその目的に反しているのに、どうして生じるのでしょうか？ 理性によって規定された、人間社会の形式的な（形式的で普遍妥当な理性法則に従った）目的を見逃してしまったり、単に実質的な目的を、どんな争いあっている党派にとっても固有でこそあれ偶然的な目的を、顧慮するということは違うどこから生じるというのでしょうか。だけど私は問題に戻りましょう。

最も大切なお方よ、大兄の著作における計画は、懷疑論哲学と批判哲学との関係を従来生じてきたよりも詳細に規定することであり、批判哲学の合法的な要求を懷疑論哲学によって満足させられることはないとして説明することであり、懷疑論哲学を独断論哲学に勝るだけでなく批判哲学にさえも勝らせようとすることです。

私はまた、ここ何年か、哲学を私のお気に入りの勉強としてきて、独断論哲学と批判【276】哲学との間の争闘に口出しをして、ご承知のように批判哲学に与したものでした。結局、私はまた、懷疑論の肩を持って、その正当

性を弁護しようとした。そこで私たちには、私たち二人が私たちの哲学的な労苦において同じ計画に従っているかのように思えたものでした。しかしながら今後、この計画が一般的に私たち二人に共通しているにもかかわらず、私たちがこれらの相違している哲学の方法そのものについて、それらの相互の関係について同じように、完全に一樣な把握に達しないまま、私がむしろ、私自身（『哲学の領域における放浪』『哲学的往復書簡』で攻撃した批判哲学の偉大な司令官（ラインホルト氏）の党派を、大兄に対抗させることが示されるでしょう。計画に関して一致しているものの計画の遂行においては相違しているということは、望むらくは、私たちの共通の研究の対象をますます啓蒙して、明澄な光へともたらすことに寄与できますように。

あなたは、（二〇頁で）ほかならぬ次のことを論証しておいでです。「懷疑論は当然、批判哲学が存立している根本命題や前提が確実にして普遍妥当的であることを要求する」と。そして（二四頁では）「私の見たところ、懷疑論は、哲学においては、物自体やその特性の現存在や非在についても、人間の認識能力の限界についても、[277] 議論の余地無く確実で普遍妥当的な根本命題に従って何かが決められているわけではない、ということ主張に他ならない」とあります。従って大兄は、懷疑論をただ、この説明の後半（人間の認識能力の限界についても、何も決められているわけではないという論点——訳者）に関して、批判哲学に対置しているだけです。なぜなら、この説明の前半には、つまり、哲学においては、物自体やその特性の現存在や非在について、普遍妥当な根本命題に従って何か確実なことが決められているわけではないということに関して、批判哲学は大兄の懷疑論と完全に合致しているからです。そして、大兄の懷疑論が批判哲学から区別されるというなら、ただ次の点においてでしかありません。すなわち、批判哲学に従うなら、物自体やその特性の現存在や非在について、これまで普遍妥当な根本命題に従って何も確実なことが決められてこなかっただけでなく、そもそも何も決められることができない、という点

においてです。これに対して、大兄の懷疑論は、表面的な見かけからすれば独断論に非常に対抗するものであるように思われますものの、それにもかかわらず、独断論に対しては、批判哲学に対してよりもはるかに好意的です。大兄の懷疑論は、決して（批判哲学もそうするように）、人間の理性が物自体の現存在や非在について、その実在的で客観・体的な特性について、そして認識能力の限界について、投げかけた問いを、端的に答えられないもののだとして説明することはありません。大兄の懷疑論は、理性が思弁の領野で営むことのできるものや将来いつか営むかもしれないものについて、徹頭徹尾何も確定しないのです、などなど。

【278】これに対して、私の懷疑論は、独断論を弁護するところからはかけ離れています。むしろ、批判哲学にもまして、独断論に反対します。私の懷疑論は、意識の事実 (*Faktum des Bewußtseins*) として、二つの認識様式を想定します。つまり、ア・プリオリな認識とア・ポステリオリな認識です。私の懷疑論が必然性と普遍性の性格を見出すのは前者のうちにであって、後者のうちにはありません。ア・プリオリな認識は絶対的にア・プリオリであるか、それとも単に比較的にア・プリオリであるかのいずれかです。絶対的にア・プリオリな認識は客観・体一般と関連する認識能力の形式のうちで基礎付けられています。これに対して比較的にア・プリオリな認識は、一定の仕方と与えられた客体そのものにおいて基礎付けられています。絶対的にア・プリオリな認識は思惟の客体に関連するか、あるいは認識一般の客体に関連するかのどちらかです。絶対的にア・プリオリな認識は客体が思惟に与えられる特殊な規定をすべて、捨象するのみならず、（どれとも規定されない）特殊な規定一般のもとの客体が考えられ得るところのア・プリオリな条件をも捨象します。比較的にア・プリオリな認識は、客観・体が思惟に与えられる特殊な規定をすべて捨象しますが、特殊な規定一般のもとの客体が考えられ得るところのア・プリオリな条件を捨象することはありません。懷疑論は主に、こうした条件やその体系的な秩序の探究に携わります。そ

れによって認識能力の限界を規定したり、確定したりできるわけです。その限りで、懷疑論は批判哲学のあとを一步一歩追うことになります。(懷疑論がそうしたことを企てる事ができると信じる若干の変更と改良を除いて)

しかしながらここに、懷疑論と批判哲学とが相互に分かれる分岐点があります。【270】批判哲学は、認識能力においてア・プリオリに基礎付けられた条件に従って客体を現実的に考えることを、意識の事実として想定します。そしてただ、ア・プリオリに基礎付けられた条件が条件であるのはどのようなやり方かということだけを証明するのです。懷疑論はこの事実を疑います、そして常識の証言がここでは、心理学的な法則に従って説明されるべき錯覚の上に存立しているがゆえに、無効であることを示そうとするわけです。さらに、この懷疑論は、批判哲学が(独断的な哲学と完全に切れないために)理性の本性のうちに基礎付けられた理性理念として想定するところの確実な表象を、単に構想力の本性において基礎付けられた表象だと説明しますが、それは、以下、もっと詳細に説明されるべきでしょう。

大兄が(四五頁で)根元哲学を非難する基礎として既にした妥当なこととして置いた命題は、あなたにとってももちろん認められたものでありましょうし、そうであるに違いありません。ただ、第二の命題だけは制限されることを必要とします。「すべての真なるもののあらゆる試金石は、一般論理学である。」まったくその通りです。しかし、ただ、あらゆる形式的な真理の、ではあるのです。

大兄はさらに(四六頁の注で)「懷疑論者が三段論法的推論の確実性を疑った時、彼らはただ次のことだけを疑っているのだ、すなわち、三段論法的推論は我々が物自体を認識するのに役立ちうるか、ということと」と語っています。あなたはここでどんな種類の懷疑論者を考えているのか、私には分かりません。理性的な懷疑論者なら三段論法的推論の形式的な真理性を、それが矛盾の根本原則に基づいているので、物自体に関してでさえ【280】疑わ

ないでしょう。だって、この原則は客体一般に、従って物自体に関連しているからです。それに対して三段論法的推論は私たちに、物自体に関して、だけでなく、現象に関してでさえも、実在的な認識のいかなる手助けにもなりません。そこでどちらの場合もここで疑いは生じないのです。

以上が、あなたの検証の計画について一般的に見ました。次の書簡において、私はあなたに、一步一步従いましょう。そしてこの検証の細部についての私の所見、並びにそこから引き出されるべき結論を敷衍しましょう。

フィラレーテス

第二書簡

あなたは、根元哲学から、次の命題を引用なさっております。

「第一節 意識において表象は、主観・体によって、主観・体と客観・体から区別されかつ両者に関連付けられている。」

この命題がここで無媒介的に表現しているのは、意識のうちで生じる事実到他ならない。これに対して表象や客観・体そして主観・体の概念は、間接的に、すなわち事実によって規定される限りで、表現している。

意識の以前には、表象や客観・体そして主観・体についてのいかなる概念も存在しない。そしてこれらの概念は、根源的に、ただ意識によってのみ可能である。その意識においてはそしてその意識によって、表象と客観・体そして【§】主観・体は、まず最初に、相互に区別されるとともに、相互に関連付けられるのである。そのもとで意識の三つの構成要素である表象と客観・体そして主観・体が意識において現出することが出来る根源的な徴標は、

それらが根源的な徴標である限り、いかなる表象された客観・体を抽象したところで、獲得されることは出来ない。これらの徴標は、それゆえ、意識の構成要素である限り、無媒介的に、一切の抽象を行なわずとも意識そのものから出てくるのであって、その限りで、徹底的にいかなる論弁をも前提とせず、一切の哲学に先行するのである。そこで意識律は、表象や客観・体そして主観・体についての哲学的に規定された概念を、前提することはない。むしろ、それらは意識律において、意識律によって、初めて規定され、樹立されるのである。これらの概念は、ただ意識律によってその意味を獲得して、意識律において全面的に包括されていて、意識律から無媒介的に導出されるような、そうした諸命題によってのみ表現され得る」(Aenesidemus: 58 f.)。

根元哲学の根拠になっている意識律について、あなたは初めにこう所見を述べておいでです。「(ラインホルト自身が求めているのとは違って)、いかなる観点からしても別の命題に従属することのないような、そして端的にいかなる他の命題によって規定されることのないような、そうした絶対的に第一の根本命題ではない。命題として、判断として、意識律は、あらゆる判断の最高の規範に、つまり、〈それによるなら、考えられ得るとされるものなら、いかなる矛盾する徴標をも含むことが許されない矛盾の原理〉に従属している。そしてその形式に関して、ならびに【28】意識律において現われる主語と述語の結びつきに関しては、この矛盾の原理によって規定されている。」

あなたによるこの所見は、私には少なからず奇異ではあります。意識律は、必須条件としての矛盾律に依存しますが、矛盾律によって規定されるのでしょうか？ 決してそんなことはありません。ある命題が他の命題によって規定されるというのは、この別の命題が客観・体一般(あるいは少なくともより高次の秩序)について妥当して、どうして意識律が所与の客体(より低次元の秩序)に当てはまらなければならぬかの根拠を包括している場合で

す。そこでたとえば、二つの辺が等しく、これら二つの辺の間に等しい角を持っている、直線に囲まれた二つの三角形は、また第三辺に照らしても相互に等しいという命題は、二つの所与の点の間にはただ一本の直線が引かれるだけであるという根本命題によって規定されています。ここで第一の命題が規定しているのは、所与の客体の間の関係（考えられた部分の等しい二つの三角形）であって、その関係はなるほど、根本命題によって完全に規定されているわけではありませんが、同じ根本命題において基礎付けられているのです。

さて、矛盾律と意識律とに関してどのような事情にあるか見て行きましょう。矛盾律は必須条件として、思索一般のあらゆる客体について当てはまります。従って、意識律において結び付けられた徴標についても当てはまります。しかしながら、だからといって、これらの徴標は矛盾律によって実際に結び付けられているものとして考えられるのでしょうか？ 矛盾律によって単にこれらの徴標は【283】（相互に矛盾しないがゆえに）結び付けられたものとして考えられることが出来ただけです。論及された例においては、二つの三角形云々などの命題は矛盾律によって、他の総合的命題の助けを借りて完全に規定されます。しかし意識律は、すべての総合的命題の第一の根本命題です。それゆえそれは、矛盾律と結びつけられた他の総合的な命題によって規定されることは出来ない。ラインホルト氏は、彼の根元哲学において、一般論理学ではなく、認識能力の批判のための基礎を供給しようとしたのです。彼はその際に、一般論理学を前提として、自らの根元哲学の根拠として、意識律を置いたのでした。その意識律は、必須条件としてあらゆる総合的な判断の根拠になるだけでなく、総合の可能性の実在根拠として根拠にならなければなりません。

あなたはさらに（六一頁で）こう言っています。「ラインホルト教授氏自身によるまったくもって正しい説明によれば（『寄稿』一一五頁）、一つの根本命題からそれ以外の命題を導出するということが物語るのは、それらの命

題において現出する表象の結びつきの必然性を一つの根本命題から導出することに他ならず、すなわち、主語と述語とが意識律において結びついている結合は否みがたいといえ、矛盾の原理によって規定される以上、意識律はこの矛盾の原理に従属する命題でなくてはならない。第一の命題とは、意識律がその形式からして、矛盾律によって規定されなくてはならない云々」

素晴らしい方よ、あなたはここでまたしても、〈命題によって規定されていること〉と【284】〈命題に依存していること〉とを混同しています。すべての命題は形式上、矛盾律によって規定されています。すなわち、すべての命題は、矛盾律に従った形式以外の形式を持つことが許されません。ところが、あらゆる命題はまさしく形式からして矛盾律によって規定されているがゆえにこそ、いかなる命題も、矛盾律によって、他のすべての命題とは違った仕方では規定されたりしないのです。〈 a は b である〉という（ a は b に矛盾しないという）純然たる形式によって、意識律における主語と述語との間の結びつきは、単に可能なものとして、要請（Postulat）として規定されているわけではありません。

（六二頁の）註にはこうあります。「矛盾律はあらゆる思索の最上の法則であるからこそ、類が種の下に属さないようにあるいは種が個体の下に属さないように、意識律の下に属することはない。」

しかし、ラインホルト氏によれば、それは逆でしょう。意識律は、意識の機能のすべて（思惟、表象など）に関連しているからこそ、最高の類なのであって、矛盾律は、単に思惟に関連しているがゆえに、意識律に従属しなければならぬのです。例えば私が、赤色について（そこに含まれている素材について）抱くような単純な表象は、既に、意識律によって、それを先ず矛盾律に即して検証するまでもなく、所与の表象として認識されるのです。なぜなら、単純な表象が多様なものを含まない以上、「矛盾律による」この検証はここでは生起し得ないからです。

さらにこうあります。「なるほど、ラインホルト氏は（『哲学的な知の基礎について』八五頁において）【285】次のように言っている。『確かに、意識律は矛盾の原理の下に存立する。ところが、意識律を規定するような根本命題に服するようにではない。むしろ、意識律が矛盾することが許されないような法則の下に服するように、なのである。』しかしながら、私が第一に考えるには、ある法則の下に服して、その法則に矛盾することが許されないようなものは、この法則によっても、この法則の定式によっても、ある根本命題によつて規定されるかのように規定されるようなものであらう」と言つておいでです。

この異議申し立ては、私が見るところでは、根拠のあるものです。なぜなら、いかなる根本命題であらうと、同時に思惟の法則だからです。私だつたら、ラインホルト氏に代わつて、こう表現したでしょう。すなわち、意識律は、これが矛盾律という一般論理学の最上の根本命題に矛盾することが許されない限り、矛盾律の下に服する、と。しかし、意識律は、（その素材に関しては）矛盾律によつて規定されないのです。

さて、あなたはさらに続けておいでです。「そして第二に、ある法則の下に服して、その法則に矛盾することが許されないということが、ある根本命題の下に服して、その根本命題によつて規定されるということと同じことを意味するのでないのなら、根元哲学によれば、表象することの法則を表現しているとされる意識律であらうと、別の命題を規定するであらうような根本命題でないばかりか、哲学のありとあらゆる根本命題のなかの根本命題でもない。むしろ、哲学における諸命題が矛盾することの許されない法則ではない。」

意識律は、他の命題がそれによつて規定される哲学の根本命題であるのはどのようにしてか、ということ【286】私は、説明しないままにしておきましょう。しかし、この著作において私によつて提起された規定可能性の命題は、すべての実在的な思索の根本命題であつて、したがつて全哲学の根本命題でもあるのです。そこからすべての命題

が導出され、それを通してすべての命題が規定される、ということを、私はあえて自信を持って主張しましょう。なぜなら、実在的な思索が形式的な思索からも恣意的な思索からも区別されるのは、形式的な思索が客体なしの純然たる形式であり、恣意的な思索が規定された形式なしで思索に与えられた客体であるのに対して、実在的な（規定可能性の命題に従って認識された）思索は所与の客体とこれによって規定された形式とを包括することによってであるからです。例えば四角の徳などというものは単に恣意的な思索です。徳と四角とは、意識自体の対象として、思索や、意識の統一における徳と四角の結合を別にして、その実在性を持っています。ですから、それらを思索したり意識の統一において結びつけたたりすることは、いかなる根拠もなく、単に恣意的なのです。例えば原因と結果の関係は、a が与えられている時は b も与えられているに違いない場合には、なるほど恣意的な思索ではありません。なぜなら、原因と結果は互いを欠いては、意識において生起しないからです。従ってそれらは、結び付けられたものとして考えられなくてはなりません。しかしながら、それらにいかなる客体も包摂されていない限り、原因と結果とを考えたり、もしくは意識の統一において結びつけたりすることは、純然たる形式的な思索でこそあれ、実在的な思索ではありません。なぜなら、この関係は単に、否定的な基準によってあるいはある客体一般を考える形式によって（原因と作用は相互に【287】矛盾することはないので）「可能なものと考えられますが、肯定的な基準によつては実在的な客体において認識されはしないからです。しかしながら三角形を考えることはすなわち、三辺で空間が閉じられているわけで、実在的な思索です。空間は自立的なもの（実体）として考えられるし、三本の線の規定は空間に内属するもの（偶有性）として考えられます。ここでは、客体一般は、実体と偶有性の関係においては単に、可能なものとして考えられるだけでなく、むしろ、この関係は所与の客体の間で現実的なものとして認識されるのです。というのは、空間は、三つの辺を規定することがなくとも、意識自体の対象だからであります。

しかしこれらの三本の線は、空間なくしては意識の対象たり得ません。従つてこの思索は形式的でもなければ恣意的でもありません。形式的でないというのは、形式的な思索なら、客体一般ではなく特定の客体（三角形）に関連するからです。恣意的でないというのは、こうした恣意的な思索や三つの辺による空間の規定がないなら、三つの辺はいかなる意識の対象でもありえなかつたでしょうからです（だけどそれらは現実的なのです）。

それゆえあなたがここで持つ全哲学の（実在的な思索の）根本命題には、それには実在的な客体に関連するすべての命題が矛盾することが許されません（いかなる命題も、その主語と述語とが規定可能性と関係していない場合には、実在的な客体に関連しません）。むしろその根本命題によつても、所与の客体に関連している他の命題はそうしたものとして規定されるのです。

例えば私には、ある直線が黒であり得るという命題が課せられているなら、私は、その命題を単に【288】恣意的なものとして説明するわけです。なぜというに、直線と黒とは規定可能性の関係にはないからです。だって、直線はア・プリオリに考えられた空間の規定ですが、黒というのは感性的な直観の経験的な規定ですからね。そこでそれら双方は、互いに依存し合わずに意識において生起することが出来ます。意識の統一におけるそれらの結び付きは、ですから恣意的で、いかなる根拠も持っていません。

しかしながら私には一〇面体が正一〇面体であり得るという命題が課されるなら、私はその命題を単に恣意的だとは説明しません。なぜなら、平面が空間に対処するのは、規定可能なものに対する規定としてであることはもちろんだからです。というのも、空間のない平面は意識のうちで生起し得ないからです。ですが、こうした客体（正十面体）の構成から明らかになるのは、この客体の思索が何ら矛盾を含まないにもかかわらず、従つて不可能ではなく、主語と述語との間に規定可能性の関係が生起するにもかかわらず、従つて恣意的ではないにもかかわらず、

それによつて考えられた客体は不可能であり、従つてこの思索は、単に形式的であつて、實在的な客体へと関連し得ない、などなど。

さて、あなたが六三頁で仰るところでは、「それにもまして第二に、根元哲学において表現されているような意識律は、〈自己自身によつて全体を通して規定された命題〉ではない。自己自身によつて全体を通して規定された命題であつたなら、まったく考えられないか、それとも正しくしか考えられないかのどちらかであり、それは、意識律が樹立されている言葉の意味についての純然たる反省によつて厳密に理解され得たであろうし、そしてその概念に【389】結び付けられ得たのは、余計でもなく少なすぎもしない微標であつただろう。」あなたがお示しになっているのは、主観、客観の概念、そして二重に関連付けられること概念が、極めて揺れていて規定されていない、ということ。表象のマトリが客体に関連するという表現は、ラインホルト氏自身の説明によれば、表象のマトリが客体の位置を占める、表象のマトリが客体に付与されている、表象のマトリが客体にさざげられている、表象のマトリは客体に依存している、表象のマトリは客体によつて規定され、与えられている、表象のマトリは客体に符合し、対応する、表象のマトリは客体について何がしかを提示する、ということになります。表象の形式が主体に関連するという表現も、以下のような言い回しによつて、主体について説明されています。すなわち、表象の形式は主体に属する、表象の形式は主体の作用である、表象の形式は主体によつて表象のマトリに添付されている、表象の形式は、主体について何がしかを提示しなければならないなど。この点で私はあなたと完全に一致しています。私は既にいろいろと（経験の心理学の第九巻の第三部、哲学的往復書簡の形での哲学の領域での放浪において）こうした説明がただ揺れ動いていて、はつきりしていないことだけでなく、それらが一般的な用法から、一切の吟味なしに哲学へと転用されているように、それによつて、言い回しの根底にある欺瞞が

いわば、哲学的な承認を獲得してしまったことを示してきました。次に私は、それについて詳細に説明しましょう。

「結局のところ、とあなたが仰るのは、三番目に、意識律は、普遍的に妥当する命題でもないし、（いかなる特定の【290】経験にも、いかなる種類の論弁にも結び付けられていないような事実）を表現するものでもない。むしろ、我々が自覚しているありとあらゆる経験や思想に伴うものである。なぜなら、まず第一にこの命題は揺れ動いているために、（その際に誰しもが何らかのことを他のように考えてしまいます）その点で（あらゆる哲学者にとつて）普遍的に妥当するものではないからです。第二にそれですから意識律は（意識のどのような作用にとつて）決して普遍妥当的ではありません」（七〇頁参照）。ここでもまた私は、あなたに同調します。私は既に上述の著作で、意識律が根源的な意識についてではなく、この規定された命題を通して、すなわち再生産的構想力によって引き起こされた意識について当てはまることを明らかにしました。このことはすぐにより詳しく説明されるべきであります。

あなたは、さらに所見を述べておいでです。すなわち意識律は、第一に総合的な命題であつて、その述語は主語（意識）について、この主語のうちで、既に徴標とか構成要素とかとして考えられているわけではない何ごとかを言表している、と。しかしながら意識律の實在的な真理は、意識の多くの表出に、表象や客観、主観そして（表象が客観と主観とに関連付けられていること）などが属しているとされる経験に基づいているのです。意識律は、それだから、根本命題に必要な不可欠な普遍性と必然性を持ち得ないのです。

ところがこれにラインホルト氏は反駁するわけです。意識律はなるほど、総合的な命題であるが、その述語がなかったなら、主語が一定の仕方と考えられ得ないような、そうした命題であるという訳です。主観や客観、表象そして（表象が客観と主観とに関連付けられること）がなかったなら、【291】意識は、一般的には考えられ得ても、

決まった仕方では意識のあらゆる機能（表象とか思索とか）の最高の条件として認識されることはあり得ません。意識律が表現しているのは、ある事実ですが、自己自身によって規定された、いかなる偶然の経験にも依存していない事実であつて、この点で意識律は、同じように意識の事実を表現している矛盾律より悪いものだといふものでもありません。――

あなたはさらに（七六頁で）、「意識律は第二に、抽象的な命題であつて、（根元哲学の著者によればすべての）確実な意識の表明の相互に共通なものを提示する。それゆゑ、意識律は、その全範囲に關して意識律に歸属する以上の確実性を要求することが出来ないなど」。

これについてもラインホルト氏は応えたことでしょう。すなわち、意識律は私に言わせるなら、意識のある表出を捨象していいのと同じように、意識のすべての表出を捨象してもいいのだ、と（いったい意識律はどのような表出をしてそうしたことができたでしょう）。意識律は捨象によつてではなく、反省によつてもたらされるのである、と。それはそれで良かったのでしょうか。なぜなら、私が既にこの著作において注意していたように、捨象が生起するのはただ、捨象によつて、（それについて捨象が生じるところのもの）が全面的に無化されはしない時なのです。こうしたことが生じるのは、それらの結び付きが必然的なものとして認識されないとともに、その分離があり得るものとして認識される、そうした経験的な客体のすべての徴標に關してなのです。それに対して、あるものの可能性の条件として考えられるものは、そのものから抽象されることなく、むしろ【292】単にそのものにおいて、反省による条件として規定され得るのです。意識律がラインホルト氏によると、意識のあらゆる表出について妥当するといふのは、意識律が私たちの知覚に従つて、あらゆる表出のうちで見出され得るからではありません。むしろ、意識律が、条件として、あらゆる表出において見出されるに違ひないからです。

「表象の根源的な概念

第二節 表象は、意識において主観によって、客観と主観から区別され、かつ双方に関連付けられるものである。」

「客観の根源的な概念

第三節 客観は、意識において主観によって、主観と表象から区別され、かつ主観から区別された表象に関連付けられるものである。」

「主観の根源的な概念

第四節 主観は、意識において自己自身によって、表象と客観から区別され、かつ客観から区別された表象に関連付けられるものである。」

「純然たる表象の根源的な概念

第五節 純然たる表象は、意識において客観と主観に関連付けられ、かつ双方から区別されるものである。」

これについてあなたは八四頁で所見を述べておいでです。「根元哲学の提起する表象の本質的な徴標の説明は、説明されるべきものよりも明らかに狭い範囲のものである【203】。そして表象の概念規定が、根元哲学全体にとつての、さらにはありとあらゆる表象の構成要素の起源について、並びに表象能力の本性についてなされる論弁にとつての根拠となつてゐるが、その概念規定が、すべての表象にあつて実際に現われる徴標を規定するものでもないし、

意識律が示すのは、どんな意識においても実際に見出されるものでもない。むしろ、表象を概念規定するといつても、心情が何かを表象するというような、特殊な種類の表象の、特殊な状態の概念規定に過ぎない。つまり、〈主観によって客観と主観から区別され、かつ双方に関連付けられるもの〉だけが表象を形成して、知覚されているものだけが心情 (Gemüth) によつて相互に区別されるとともに相互に関連付けられ得る (なぜなら、区別立てた裏関連付けたりするという行為は、〈相互に関連付けられ得るとともに、相互に区別され得るもの〉が現存する時に初めて生じ得るのであつて、区別され得るものが何も現前しないところでは、区別立てすることなどまったく考えられないからである) ということが確実なら、直観は、類という概念が、直観には当てはまらない以上、いかなる種類の表象という類でもなかったであろう。つまり、直観している間、客観と表象との区別が生じることは当然 (natuerlich はマイモンによる付加) ない。なぜなら、直観が持続する限り、直観とは違う客観は決して注意されないからである。従つて、表象と客観との区別立てを行なつたなら、直観を無にしたであろう。【297】さてしかし、

ラインホルト氏が彼の著作のすべてにおいて主張しているように、直観も一種の表象だというので、云々。」

尊敬すべきお方よ、あなたが、(先に引用した著作において) 既に以前に私がラインホルト氏に対抗して持ち出してきたことにおいて、私と完全に同調しているのを見出すことは非常に嬉しいことです。私が既に示してきたことですが、語用法に従えば、表象は部分の描写 (Theildarstellung) に他なりません。従つて表象が生起するのはただ、客体が初めて全面的に描写され (知覚され)、そのあとから、構想力が客体を、構想力の機能に従つて、部分的に再生産して、さらに記憶力を媒介としてその写像をオリジナルなものに関連付ける、すなわち客体を表象する、というような場合に限られます。根源的な (構想力によつて再生産されていない) 感性的な知覚は、自己自身の外部の何ものをも表象することはありません。しかしながら、実際にそのことが物語るのは、根源的で感性的な

知覚は何も表象しないということです。そこで、私たちがどんな根源的な知覚をも、表象として、（意識の外の）何らかのものに（実際にこの事実それ自体は否定されないように）関連付けるなら、こうしたことが生じるのは、構想力の再生産を客体にあるいは客体の根源的な知覚に関連付ける習慣によって、結局のところ根源的な知覚をさえ（意識の外の）何ものかに関連付ける構想力のイリュージョンによるわけです。しかしながら、明敏なラインホルト氏がどうしてこのようなことを見過ごし得たのかは、簡単に説明されます。

ラインホルト氏はこの表象についての概念を、ヴォルフライプニッツ哲学のうちに【195】見出したのであって、そこでは、同じように、どのようなそれ自身根源的な知覚であれ、何らかのものについての表象と呼ばれたのでした。しかし、ラインホルト氏は、ヴォルフライプニッツ哲学によれば、どんな知覚であれ物自体に関連付けられるからこそ、その哲学の言うところによれば、その知覚が正当性を持つのだ、ということには気づかなかつたのです。ですが、批判哲学者としてのラインホルト氏は、認識能力の外部の、こうした物自体への関連に関しては、これを認めてはいけなかつたのです。なぜなら、こうした関連は何を意味するのでしょうか？ 関連、関係、などそうしたものは、結合の種類であります。しかし結合というのは、常に、結合されるべき何ものかを、そして意識における結合の根拠とを、前提しているのです。そうした事実は、ラインホルト氏にとつても邪魔になるものだったでしょう。なぜなら既に明らかになつたように、心理学的な法則によれば、構想力のイリュージョンからそうしたことは簡単に説明が付くからです。

表象の概念の普遍性（意識のどのような変様であろうと、表象としては何らかのものに関連付けられるということ）は、この概念を全面的に廃棄します。それに関してはおよそ、インド人たちの問題のような事情にある。すなわち彼らは、世界が二頭の象の上にあり、その象たちは巨大な亀の上に乗っていると人が言つて聞かせた際に、素

朴なことにこう尋ねたのでした。結局その亀は何の上にあるのか、と。

「表象能力の根源的な概念」

第六節 表象能力は、純然たる表象を、すなわち、〈意識において客観と主観とに関連付けられるものの【296】双方から区別されるもの〉を可能にするところのものであり、そして〈表象の原因において、すなわち表象の現実性の根拠を含んでいるものにおいて、一切の表象に先立って存在しているに違いないもの〉のことである。

第七節 感性的な表象も、概念や理念も一緒になって、表象という名前を担っていて、この名前は、表象一般という述語のもとで、先に挙げたものにとって相互に共通であるものを表示するように、感性や悟性、そして理性は、感性的な表象の・概念的把握の・そして理念の能力として、表象能力と呼ばれる。それらにとって相互に共通しているものは、表象能力一般と呼ばれる。

第八節 表象能力一般は、なるほど、表象する力の外部や、感性・悟性・理性の外部に現存することはできないが、しかし、表象能力の概念は、力からではなく、ひとえに、表象の作用から、つまり純然たる表象から、しかも、ただ表象の概念から、その概念が意識律によって規定されるのに応じて、導出される。」

ここでああなたは、（九四〜九六頁で）こう注記しておいでです。「そこでもし、批判哲学の本当の価値と要求の正しさを正当に洞察しようとするなら、批判哲学が、その結論に鑑みて、必然的な明証性と無謬性を要求して

いる、その要求の正しさを正当に洞察しようとするなら、「……」人はとりわけ、基礎と原理とを検証しなくてはならない。そうした基礎と原理とに基づいて、それらに従って批判哲学が示しているのは、我々の認識において、（何か・プリアリに、かつ心情によって規定されたもの）が現出するとともに、こうしたア・プリアリに規定【297】されたものは、我々の認識のア・ポステリオリに与えられた素材の形式を決定するということである。

しかしながらこうした検証にあたつては、とりわけ、ヒュームの懐疑論の要求が顧慮されなくてはならない。（以下、かなり自由な要約になる）つまり、批判哲学は果たして自ら申し立てていたように、ヒュームの懐疑論の要求に満足していたのかどうか、この懐疑論を根本から解消していたのだろうか、などのことが顧慮されなくてはならない。」

ここでとりわけ初めて規定されなくてはならないことがあります。すなわち、批判哲学ということでは何が理解されなくてはならないのか、ヒュームの懐疑論ということでは何が理解されなくてはならないのか、ということです。ラインホルト氏以外のほとんどすべてのカント主義者たちが、カントの『純粹理性批判』とその帰結を、唯一可能な批判哲学だと見なしています。そして、少しもそこから逸れようとはしないで、たとえ彼らがカント主義者たちとはなく批判哲学者たちと呼ばれたいにしても、こうしたことが彼らによって生じているのは、ただ、自らについて受け売りをする人という恥辱を取り除いて、あたかも自分たちはその点で自覚的にやっていたのだというポーズを取ろうとするため、なのであります。しかし厳密な研究を行なえば、これらのいわゆる批判哲学者たちは、受け売りをする人以上の何ものでもないことが明らかになるでしょう。

ラインホルト氏は、並外れた哲学的な精神に満ちていて、そのために必要な天分を備えているので、こうした奴隷根性に耐えることは出来なかったでしょう。ラインホルト氏はカントの『純粹理性批判』を唯一可能な批判だと

は見なしませんでしたし、批判の種類のなかでも最良のものとさえも見ませんでした。ラインホルト氏は、『純粹理性批判』の価値を誤認していないにもかかわらず、『純粹理性批判』にふさわしい一切の賞賛を与えていながら、『純粹理性批判』の不完全なところ、欠けているところを【298】控えめな仕方では表に出して、批判哲学への新たな道を拓こうと、敢えてしたのでした。

既に、さまざまな折りに引き合いに出してきましたし、これからも引き合いに出すだろう根拠に基づいて、私がこの道を進んでゆくことができないにせよ、そしてこの点でラインホルト氏の論敵として自らを示さざるを得ないように見えるにせよ、私は次の主要な点でラインホルト氏と一致するものであります。すなわち、(一)すべての認識には、認識能力の批判が先行しなければならない、(二)カントの批判はその手のもので唯一可能な批判ではないし、批判の種類のなかでも最良のものでさえない、という点です。

それに対して、私がラインホルトと違うのは次の点です。すなわち、(一)私は、批判哲学一般についての彼の期待を過大なものと見なします。(二)ラインホルト氏が意識律の、そして表象や客観などについての彼の説明の基礎とした事実を、構想力のイリュージョンだと私は見なします。これによって私は、彼の基礎を根本から揺るがします。しかし私は(三)すべての実在的な思索の最上の根本命題を突き止めました、つまりこの著作で私が提示して、すべての純粹哲学の根拠にした規定可能性の根本命題を、そしてひとたび洞察されただけで望むらくはあらゆるテストに合格するはずの規定可能性の根本命題を突き止めたのです。

古代の哲学者や近代の哲学者における懐疑哲学の概念も、非常に揺れていて、規定されませんでした。次に明らかにするのは、懐疑論そのものについての私の概念が、あなたの概念とは違っているということです。

【299】それでカントや彼の追従者たちが、彼らの批判哲学を通して、ヒュームの懐疑論を根本から持ち上げた

と言っていた時に、批判哲学がヒュームの懐疑論について行なっていた把握によれば、このことは十分に本当のことだったのでしよう。私はここで、こうした揺れる把握を顧慮することなく理性的な懐疑論についての私独自の把握と、私がそれを基礎付けるために従った方法とを、私にできるだけ规定的に講述しましょう。そこからヒュームの懐疑論と批判哲学との関係が簡単に規定されることでしょう。

私の懐疑論は私の批判哲学を、以下の七つの問いへの回答によって基礎付けるものです。

第一問——私たちは思索一般の客体に関連するア・プリオリな純粹認識（概念や根本命題）を持つのでしょうか？
答え——はい。

第二問——私たちは認識の客体にア・プリオリに関連するア・プリオリな純粹認識を持つのでしょうか？
答え——はい。

第三問——私たちは、ア・ポステリオリな認識の客体に関連するア・プリオリな純粹認識を持つのでしょうか？
答え——いいえ。

第四問——私たちはどのような権利をもって、ア・プリオリな認識の客体に関連するア・プリオリな純粹認識を用いることができるのでしょうか？

答え——規定可能性の根本命題に従ってです。

第五問——私たちはア・プリオリな純粹認識を実際に、これらの客体について用いるのでしょうか？
答え——はい！

【300】第六問——なぜ私たちはア・プリオリな純粹認識を用いなければならないのでしょうか？

答え——なぜなら私たちは、そうでもなければ、認識の客体を（私たちが持っているように）持つことがで

なかったからです。

第七問——どのような権利をもってそしてなぜ、私たちはア・プリオリな純粹認識を、ア・ポステリオリな認識の客体について（私たちがそれを実際にそうした認識の客体について用いているという前提の下で）用いることができるし、また用いなければならぬのでしょうか？

答え——私たちがア・プリオリな認識の客体について、ア・プリオリな純粹認識を用いることができるし、用いなければならぬというのと同じような権利をもって、そしてそうした理由でもって、です。私はそれについてもっと詳細に説明しましょう。

こうした研究において投げかけられるに違いない第一問は、果たして私たちは、純粹な認識を、ある客体一般を思索する際の条件として、いかなる（ア・プリオリであろうとア・ポステリオリであろうと）与えられた客体にも、絶対的にア・プリオリに（客体を規定する以前に）関連付けられるような、すなわち概念や根本命題そして公準を持つているのであろうか、という問いです。この問いは、「はい」でもって答えられます。そしてその証明は、私たちに一般的な論理学を供給します。これは、矛盾の根本命題や思索の諸形式をある客体一般を考えることができる公準（Postulat）として絶対的にア・プリオリに提起するものです。この問いに答えることもしくは（私たちは純粹な認識を持つている）などの命題は、実際のところ一般的な論理学に属して、認識能力に対する私たちの批判においては単に定理として、前置きされているのです。

【80】第二の問いは、私たちは、ア・プリオリな認識の客体に絶対的にア・プリオリに関連付けられる純粹な認識を持つているか、というものです。この問いは既に次のような事実を前提としています。すなわち、私たちは認識の客体を、すなわち私たちの説明に従うなら、思索の外部で（直観において）規定されているし、なおも思索

によってそれに加えて規定可能な客体を持つている、ということです。そしてその問いは、ただ、果たして私たちは絶対的にア・プリオリに（この客体を規定する以前に）それに関連付けられる純粹な概念や根本命題を持っているのかということでしょうかありません。この問いはおなじように「はい」でもって答えられます。そしてその証明は純粹な数学を与えるのです。

我々は、既にこの著作で次のことを示してきました。すなわち、実在的な客体が可能なのは単に、実在的な客体に結び付けられている多様なものは、規定可能性との関係において認識されるからです、すなわち、実在的な客体の構成要素が主語として、（これは自体的に意識の対象である）規定可能なものとして、他の構成要素は述語として、（それ自体としてではなく、前者の構成要素と結びついてこそ意識の対象でありうる、そうした）前者の構成要素の規定として、その逆にはならず、認識されるからです。そうした基準がなかったなら、〈考えること〉は、単に形式的であるかまったく恣意的であるかではあるものの、実在的ではありません。そこで数学の客体は、規定可能なものや規定についての純粹な概念、さらには数学の客体に（それを規定された形で認識する前に）絶対的にア・プリオリに関連する規定可能性の根本命題を前提するのである。

第三の問いは、私たちは、【§§】経験的な客体に絶対的にア・プリオリに関連する純粹な認識を持つてでしょうか、というものです。この問いは、カントの『純粹理性批判』において、「はい」でもって答えられています。そして、一切の証明の代わりに、一般的な用法が事実として、その問いに対して引き合いに出されています。例えば私たちは、火が石を温めると言います。すなわち火は、石が温まる原因なのです、などと。同じようにして私たちは、どんな現象に対してもその原因を求めます。そこで、このことは原因の概念と、いかなる現象であれ原因を持つていないに違いないという根本命題とを前提するのである。

しかしながら、私たちの認識能力の批判は、この問いに対して、「いいえ」で答えます。というのも、この問いが示しているのは、いわゆるこうした事実なるものが、構想力の欺瞞に基づいているということです。これらの概念や根本命題は、もちろんア・プリオリなのですが、それらは、実在的な使用においてそれらに帰属するような意義しか持っていないとせし、ア・プリオリな客体についての実在的な使用しか持っていないのです。例えば実体 (Substanz) は私たちの批判によれば、偶有性 (Akzidens)、そして〈それ自体としてではなく実体の偶有性として実在しうるもの〉が変転するのに対して、〈それ自体で実在したままのもの〉ではありません。むしろ、〈意識の対象それ自体でありうるもの〉、そして〈それ自体としてではなく、意識の対象と結びつくなかで意識の対象でありうるもの〉などです。このことが、私たちの懐疑論の基礎の全体なのです。

第四の問いは、どのようにして私たちは、これらの純粋な概念や根本命題それ自身を、ア・プリオリに与えられた客体について、絶対的にア・プリオリに用いることができるのか、という問いです。なぜなら、【30】それらの概念や根本命題は、認識一般の規定されていない客体に、単に可能なものとして関連付けられるので、それらを規定された客体について、現実的に用いることの根拠を、私たちは何ら持っていないからです。例えばどのような権利を持って私たちは、ある直線において、線一般の概念を主語として、真つ直ぐであるという概念を述語として考えこすれ、逆なようには考えないのでしょうか？ まさにどのような権利を持って、私たちはそもそもこれらの概念を、(実在的な) 主語と述語との関係のなかで考えて、それによって直線を実在的な客体として考えるのでしょうか？ 何故に私たちは、同じように線と〈甘くあること〉とをこうした関係のなかで考えて、それによって甘い線という概念を実在的な客体として規定しないのでしょうか？ その答えはこうです。こうしたことが出来るのは、規定可能性の根本命題に従ってです、と。私たちは、これらの概念を、論理的な関係を使用する基準として前

提されている意識一般に対する實在な関係のうちで認識するがゆえに、論理的な相互関係において考えているわけです。ですから、線が主語として、〈真つ直ぐあること〉が述語として、思索を通して規定されているのは、線はそれ自体として意識の対象であり得ますが、〈真つ直ぐあること〉はそれ自体としてではなく、むしろ、線の規定として意識の対象たり得るからです。これに対して、線と〈甘くあること〉は、意識に鑑みて、相互に独立しています。それらを主語と述語の関係のなかで一緒に考えてみても、単に恣意的であって、實在的な根拠を持っていないのです。

これらの概念や根本命題が認識のすべての客体に関連付けられますので、それらは認識することには【304】必要で、私たちはそれらを認識一般の客体について用いなければならないのです。そこで第五の問いは、どうして私たちはそれらの概念や根本命題を用いなければならないのか？でした。これに対する答えは、こうです。すなわち、そうでもなければ私たちは、思考のどのような實在な客体をも持ち得なかったでしょう（でも実際は持っているんです）、なぜなら、既にこの著作で示したように、考えられた基準によって規定された思索だけが、實在な客体を規定することができるからです、と。

第六ならびに第七の問いが関係しているのは、経験的な客体について純粋な認識を使用することです。さて私が、こうした使い方を事実として認めないからこそ、だからといってその可能性を拒否することさえしないままなので、私はこの問いを（その事実を前提しているカントの批判が絶対的に提起して、そのやり方に従って答えていた問いを）、単に仮定的（hypothetisch）に提起することができるだけです。つまり私たちが純粋な認識を、経験的な客体について用いているという事実を前提するなら、私たちが経験的な客体について、純粋な認識をいかにして用いることができるのか、なぜ用いなければならないのでしょうか？ この答えは、前の問いに対する答えと同じ

ような結果になるでしょう。なぜなら、私は考えられた経験的な客体のいずれにも、実在性を与えないからです。考えられた経験的な客体は、ア・プリオリに実在的な客体のようには、規定可能性との関係で認識されませんし、少なくとも経験的な客体においてはこうした関係が推定されたりはしないのです。

古代の人たちはどのような種類の懐疑論を考えていたのでしょうか、D・ヒュームはどのような種類の近世の懐疑論を考えていたのでしょうか、私には分かりません。しかしあなたがここで持ち出しておいでなのは、懐疑論であり、並びにこれと結びついた認識能力の批判ですが、それらはきつと、私から申し上げるのも口はばつたいのですが、[305] 根本的には『純粹理性批判』に何もひけをとらないものです。

果たして批判哲学は、D・ヒュームの懐疑論を根本から取り除いたのかどうか、引き続き私たちは見てゆきましょう。私がここで概要を提示したような私の懐疑論を、批判哲学が取り除くようなことはきつとしないでしょう。

あなたは(九七頁で)こう書いておいでです。「さて、根元哲学の第六節から第八節にかけては、表象能力の本性について、暫定的に(vorläufig)語られていたが、以下のような成り立ちである。(a) 表象能力は表象の現実性の原因にして根拠である。(b) 表象能力はいつさいの表象に先立って現前していて、しかも一定の仕方で現前している。(c) 表象能力は、いかなる原因もその作用とは異なっているように、表象とは異なっている。(d) 表象能力の概念は、ただ表象能力の作用から、つまり純然たる表象から導出される、そして表象能力の内的な徴標もしくは規定的な概念を獲得し得るためには、純然たる表象の概念を完全に展開しなくてはならない。」

「その際、先ず初めに私たちが十分に探究しなくてはならないことは、何によって根元哲学は、客観的な実在についての熱狂的な知見へと到ったのか、どのような論弁によって、根元哲学は、意識律においてそれについて何も含まれていない(なぜなら、意識律は事実だけを表現するべきものであるから)ところのこうした(表象の原因と

してのあるものの）実在を、提示するのか、ということである。」（一部、省略を伴った引用）

「さて、『根元哲学の主要契機の新たな叙述』においては、表象能力の客観的な現実性についての証明は、どこでも【306】言及されていない。しかしながら、『人間の表象能力の新理論の試み』においては、（一九〇頁を参照するなら）そうした証明への言及がなされている。そこではつまり、こうなっている。『表象は、その現実性についてすべての哲学者たちが一致している唯一のものである。少なくとも、それについて哲学的な世界において人の一致するものが一般的にあるとしたら、それは表象である。いかなる観念論者も、いかなる独我論者も、いかなる独断的な懷疑論者も、表象の現存在を否定することはできない。ところが、ある表象を認める人ならば、表象能力をも認めなくてはならない。表象能力とは、それがなかったならいかなる表象も考えられないものを意味する』。

思惟を現存在から区別しようとする批判哲学の友人によって、表象能力の客観的な現存在のためのそうした証明は、ほとんど期待されていなかったのが、最近の哲学においても、多くのことが、表象能力の客観的な現存在の確実性に依拠している。しかしながら、批判哲学の友人においては、実際のところ、我々の内なる表象と思想の性質から、我々の外部の事柄や事柄それ自体の性質へ推論がなされているのである。そして表象能力の客観的な現実性のためのこの証明を構成する論弁は、本来、次のようなものである。すなわち、相互に相手なしでは考えられえないものは、相互に相手なしでは存在し得ない、しかし、表象の現存在と現実性とは、表象能力の現存在と現実性がなかったら考えられ得ない。そこで、表象能力もまた、われわれの内なる表象が現前するのとおなじように、客観的に確実に現存するに違いない。（以下、引用符の中ではあるがマイモンによるまとめ）しかし、こうした誤った証明の仕方ではまさに、【307】批判哲学が独断論に対して投げかけた非難と同じものである。こうした誤った証明

の仕方の有効だとするのなら、独断論をも有効だと認めなくてはならなかったであろうに、などなど。」

私は敢えて、ラインホルト氏に注釈を加えて、彼をあなたの非難から弁護しようとするものではありません。ラインホルト氏のように厳密で批判的な哲学者なら、確かにそうした形而上学的な表明を慎むべきであったかもしれませんが。ただ彼は、表象の中に含まれているものを、あるいは表象の可能性の条件として前提されなくてはならないものを、表象を現実のものとする原因や力などに些かなりとも気にかけることなく、展開するべきだったのです。そのような研究こそ形而上学に帰属するわけで、この可能性と範囲は、まず認識能力の批判によって決定されるはずなのです。そこで私は、以下の所見を述べたいと思います。

(一) 表象能力を説明する際(第六節)に基礎に置かれた、能力一般についてのラインホルト氏の説明は、正しいものではありません。表象能力とは純然たる表象を可能にするものでありますから、能力一般はあるものの可能性の根拠なのです。しかしだからといってこのことは、単に哲学的な用語法に反するだけでなく、何ら意味を成さないのです。哲学的な用語法に従うなら、能力とは、可能性の根拠ではなく、あるものが現実的である根拠であって、力とはこうした根拠をうちに含むものなのです。可能性の根拠が意味しているのは普遍的なもの(規定可能なもの)であって、これがなかったなら、特殊なもの(規定されたもの)は意識において生じることができないのです。そこでたとえば、空間の表象は【*geometrisch*】三角形が可能であるための根拠もしくは条件なのです。ですから、いずれも、相互関係のなかにあります。空間は三角形として考えることができますが、三角形は空間の中で考えられなければなりません。しかしながらここでは、能力という言葉が用いられることはないのです。空間は三角である能力を持っているなどと言うことはできません。むしろ単に、空間は三角であることもできるのです。なぜなら、能力とは常に、主体の行為によってもたらされるものに関わるからです。そこで、空間ではなく、空間を表

象する主体が、空間を三角形として規定する能力を持っているわけです。

さて、批判哲学に従えば、さまざまな表象の主体は、私たちにとっては、純然たる形式的な概念ですので、その主体は、表象力とも表象能力とも呼ばれることのできないものです。なぜなら、どちらにせよ、実在的な客体や（因果関係の）実在関係（*Realverhältnis*）を前提しているからです。ところがもし、ラインホルト氏が表象能力ということで理解していたのは、さまざまな表象が現実にある実在根拠（原因）ではなく、単にすべての実際の表象に共通なものであったというのなら、それはたとえば、引力ということで理解されるのは、引きつけることの原因ではなく、単にそれに従って引きつけることが出来るところの普遍的な方法もしくは法則であるのと、同じようなことです。であるからして、実際のところ、表象能力は、（こうした普遍的なものを形成する）純然たる表象から区別されることはまったくなかったでしょう。ですからラインホルト氏は、純然たる表象を説明してしまつた後ならば、（何も新しいものには到らないでしょう）表象能力を全面的に無視すればよかったのです。

（第二書簡、訳了）

＜解題＞

本稿は、ザロモン・マイモン（一七五三―一八〇〇）の『新論理学試論』に付録として収められている全七編の「エーネジデムス宛のフィラレーテスの書簡」のうち、「第一書簡」と「第二書簡」を訳出したものである。

そこでマイモンは、ラインホルトの表象一元論に対する「エーネジデムス」の論難の論点を整理しながら、些かラインホルトに肩入れするスタンスから、ラインホルトの意識律と「エーネジデムス」に対する反論を展開して行

く。

シュルツェのラインホルト批判の第一点は、意識律といえど矛盾律に従わなくてはならず、また矛盾律によって規定されなくてはならない以上、絶対的に第一の根本命題ではない (Vgl. Aenesidemus, 60 f.) というところにある。しかしマイモンは、ありとあらゆる命題が矛盾律によって規定されているからといって、それは形式上のことであって、依存しているわけではないとする。そして意識の機能のすべてに関連しているがゆえに最高の類である意識律に、単に思索に関連しているだけの矛盾律は従属しなければならない、という (Vgl. Neue Logik, 284)。「私だったら、ラインホルト氏に代わって、こう表現したでしょう。すなわち、意識律は、これが矛盾律という一般論理学の最上の根本命題に矛盾することが許されない限り、矛盾律の下に服する、と。しかし、意識律は (その素材に関しては) 矛盾律によって規定されないのです」 (Neue Logik, 285)。マイモンにしてみれば、「矛盾律」は形式的な原理でしかなかったに違いない。原因と結果を考えることでさえ、具体的な客体が想定されていない限り、その結び付きは可能なものであれ、形式的な思索でしかない、と見なすからである。」 (Neue Logik, 285)。

ラインホルトの『哲学知の基礎について (Ueber das Fundament der philosophischen Wissens)』によれば、「私は意識律を、自己自身によって規定された命題だと呼んだ。こうした命題だということでは私が理解しているのは、その意味がより高次の命題によって規定されることのない命題、ということである」 (FdpW, 82)。シュルツェは真つ向から否定する。「根元哲学において表現されている意識律は、自己自身によって全体を通して規定された命題ではない」 (Aenesidemus, 63; Neue Logik, 288)。加えてシュルツェは、意識律は普遍的に妥当する命題ではなく、意識の事実を表現する命題でさえなく、我々が自覚しているありとあらゆる経験に伴うものだ (Vgl. Aenesidemus 70 f.; Neue Logik, 289 f.) として、有効性を自己意識に限定したのである。

マイモンはこれには同調する。「意識律が根源的な意識についてではなく、(…)再生産的な構想力によって引き起こされた意識について当てはまることを、私は既に明らかにしてきた」(Neue Logik. 290)というのである。とはいえ、シュルツェが意識律を抽象的な命題でしかないと思なす議論に対しては、「意識律は抽象化によってもたらされるのではなく、反省によってもたらされる」(Neue Logik. 291)とした上で、むしろ「意識律は、条件として、意識のあらゆる表出において見い出されるに違いない」(Neue Logik. 292)と、ラインホルトを代弁しさえしているのである。

シュルツェは、ラインホルトの概念規定が曖昧で説明が不足していることを指摘する。(主観によって客観と主観とから区別され、かつ双方に関連付けられるもの)だけが表象を形成するというラインホルトの説明では、(相互に関連付けられ得るとともに、相互に区別され得るもの)が現存する時に初めて、(区別立て)も(関連付け)も生じ得るのであって、(区別され得るもの)が何も現前しないところでは、(区別立てすること)などまったく考えられない以上、直観している間、客観と表象との区別が生じることとはなかったであろうし、表象と客観との区別立てを行なったなら、直観を無にしたであろう。にもかかわらず、ラインホルトは直観をも一種の表象だとしている、と難詰する (Vgl. Aenesidemus. 84 f.)。

マイモンはこの非難に同調しつつ、次のように転釈する。「表象は部分の描写 (Theildarstellung) に他なりません。従って表象が生起するのはただ、客体が初めて全面的に描写され (知覚され)、そのあとから、構想力が客体を、構想力の機能に従って、部分的に再生産して、さらに記憶力を媒介としてその写像をオリジナルなものに関連付ける、すなわち客体を表象する、というような場合に限られます。根源的な (構想力によって再生産されていない) 感性的な知覚は、自己自身の外部の何ものをも表象することはありません」(Neue Logik. 294)。にもかかわ

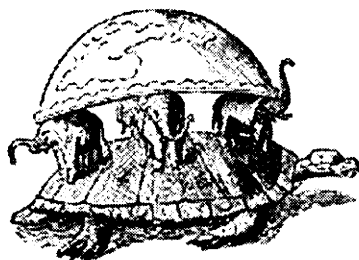
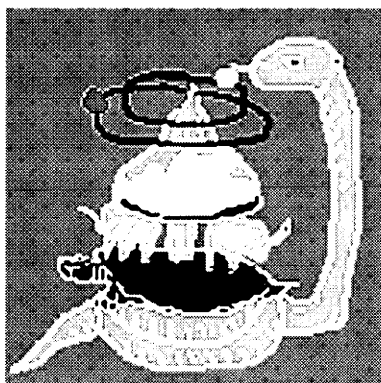
らず、ラインホルトにあつては表象が意識の外の何らかのものと関連付けられてしまうことを、マイモンは、「構想力のイリュージョン」(Neue Logik. 294)と呼んだのである。関連や関係などと言う場合には常に、結合されるべき何ものかと結合の根拠とが前提されなくてはならないからである。

こうしてマイモンは、次のようにラインホルトに対する自らの立場を総括する。「私は次の主要な点でラインホルト氏と一致するものであります。すなわち、(一) すべての認識には、認識能力の批判が先行しなければならぬ、(二) カントの批判はその手のもので唯一可能な批判ではないし、批判の種類のなかでも最良のものでさえない、という点です。／それに対して、私がラインホルトと違うのは次の点です。すなわち、(一) 私は、批判哲学一般についての彼の期待を過大なものと見なします。(二) ラインホルト氏が意識律の、そして表象や客観などについての彼の説明の基礎とした事実を、構想力のイリュージョンだと私は見なします。これによって私は、彼の基礎を根本から揺るがします。しかし私は(三) すべての実在的な思索の最上の根本命題を突き止めました、つまりこの著作で私が提示して、すべての純粹哲学の根拠にした規定可能性の根本命題を、そしてひとたび洞察されただけで望むらくはあらゆるテストに合格するはずの規定可能性の根本命題を突き止めたのです」(Neue Logik. 298)。

確かにラインホルトなりに、表象の根拠を示そうとして、「表象能力」なるものへと論及してはいた。しかしそれは、基礎付けの基礎付けを求めて無限背信に陥る、言わば、ミュンヒハウゼンのトリレンマに陥ることをマイモンは剔抉した。ラインホルトが表象能力ということで理解していたのは、「単にすべての実際の表象に共通なもの」(Neue Logik. 305)でしかなかったと解釈して、ラインホルトの陥った「構想力のイリュージョン」を次のように説明したのである。「表象の概念の普遍性(意識のどのような変様であろうと、表象としては何らかのものに関

連付けられるということ）は、この概念を全面的に廃棄します。それに関しておおよそ、インド人たちの問題のよ
うな事情にある。すなわち彼らは、世界が二頭の象の上にあり、その象たちは巨大な亀の上に乗っていると人が言っ
て聞かせた際に、素朴なことにこう尋ねたのです。結局その亀は何の上にあるのか、と」(Neue Logik, 295)。

参考図 古代インドの世界観



この論争にはシェリングも『知のトポス』本号の二三四頁に訳出した『最近の哲学的文献の一般的概観』におい
てコミットしている。そこから想像できるのは、こうしたマイモンの思索が、ラインホルトからフィヒテへと到る

ドイツ観念論の思潮の中で、フィヒテに『エーネジデムス』を克服する方途を示した、ということかもしれない。ラインホルトが「表象能力」を持ち出すことによって、地球の基礎付けに象を、さらにこれを基礎付けるために亀しようとする、言わば〈還元モデル〉に基づく体系を、避けようとする気持ちにさせたであろうという思いに誘われる。それは、ラインホルトにおける体系の基礎とされた、「客観と主観とに対する表象の区別と関連」を、象や亀（表象能力）に依拠させるのではなく、地球そのもの（意識）に内在化させることが必要だという自覚をフィヒテに迫るものであったと推断したくもなるのも正直なところである。だがそこには、一筋縄ではゆかない問題が残る。（栗原隆「表象もしくは像が支える世界と哲学体系——知的世界を構築する神話としての〈神話〉としての〈基礎付け〉と自己知の体系——」〔『科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書・「新旧論争」に顧みる進歩史観の意義と限界、並びにそれに代わり得る歴史モデルの研究』所収、二〇〇八年）を参照されたい。）

底本としては、神戸大学文学部所蔵の、次の一九一二年の刊行本を用いた。Maimon: Briefe des Philaetes an Aenesidemus. In: Versuch einer neuen Logik. Herausgegeben von der Kantgesellschaft (Verlag von Reuther & Reichard) Berlin. 1912. マイモンに通じた平川愛氏を得てこそ為し得た翻訳であったことを記して、共訳者への謝辞にしたい。

（栗原 隆）